

科学博物館ニュース速報



Vol.58 2024/3/15

館長よりメッセージ

➤ 科学博物館長・工学研究院教授 金子 敬一

早いもので、今年度も残り1か月を切りました。この間、1月12日(金)には盛山文部科学大臣、2月21日(水)には藤原文部科学事務次官が相次いで当館を訪問されました。短い時間の中、色々と質問をいただくなど、お二方とも興味深く見学していらっしゃる様子でした。

また、2月3日(土)から10日(土)にかけて、科学博物館支援団体である友の会の第40回サークル作品展が開催されました。10サークルすべてが参加され、素晴らしい作品展となりました。さらに、3月2日(土)には、友の会の修了式がありました。2年間の休会を経て修了証書を受け取られた皆様のお顔は誇りに満ちていて、明るい雰囲気です。

一方、現在開催中の「タイガー計算機展」に関連して、2月10日(土)にはトークイベント、17日(土)には科学博物館の支援学生団体 musset によるイベント「歯車で計算?! タイガー計算機を触ってみよう!」が開催され、多くの方々に参加いただきました。また、3月23日(土)には、ギャラリートークが予定されています。

上記に加えて、3月16日(土)には、情報処理学会全国大会において、科学博物館支援団体の繊維技術研究会と共同で「自動操糸機の織度感知と自動給繭機構の理解」と題した発表を予定しています。これは日本学術振興会科学研究費補助金により当館で実施している研究課題「国産自動操糸機 HR-2 の 3D デジタル復元と動態展示継承モデル開発」の成果発表となります。

また、3月21日(木)より、本学農学部生物生産学科土壌学研究室が所有される「黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクション」のデジタルアーカイブを科学博物館ウェブサイトで公開するのに合わせて、科学博物館分館(府中キャンパス農学部本館2階展示室)において「岩石標本ミニ展」を開催する予定です。是非ご覧ください。

さて、この3月末で館長の職を退くこととなりました。この4年間のうち初めの2年は、コロナ禍で大変に苦しみましたが、3年目からは活動も徐々に回復し、何とか乗り切ることができました。この間、来館いただいた方々に加え、千葉学長、永田理事をはじめ、歴代の担当理事、農工両部局の教職員、支援3団体、博物館教職員の皆様から多大なご支援を賜りました。ここに深く感謝いたします。末筆ではございますが、皆様の益々のご健勝と新館長の下での科学博物館のさらなる発展をお祈り申し上げます。

目次

- ・館長よりメッセージ／金子敬一……………P.1
- ・副館長よりメッセージ／高橋美貴……………P.2
- ・創基 150 周年記念イベント告知／齊藤有里加……………P.2
- ・「友の会サークル作品展」報告／柴田郁子……………P.3
- ・「タイガー計算機展」トークイベント報告／上田裕尋……………P.4
- ・「タイガー計算機展」musset イベント報告／塩沢真奈……………P.4
- ・「ワタを育てて機械を動かそう」ワークショップ・友の会展示報告／齊藤有里加……………P.5
- ・岡谷蚕糸博物館連携企画展講演会開催報告
／森田聡美 (岡谷蚕糸博物館)……………P.5
- ・学芸員実習報告／上田裕尋・学芸員課程履修生……………P.6
- ・繊維技術研究会「新会員募集」／葛西成治……………P.7
- ・収蔵資料活用報告……………P.8
- ・Information……………P.8

東京農工大学科学博物館 分館(府中キャンパス農学部本館)

公式サイト: <https://www.tuat-museum.org/> / X.museum@tuat.kahaku.ac.jp で博物館情報発信中!

【主催】東京農工大学科学博物館 【共催】東京農工大学農学部生物生産学科土壌学研究室
【協力】2017年度、2018年度、2021年度博物館実習生

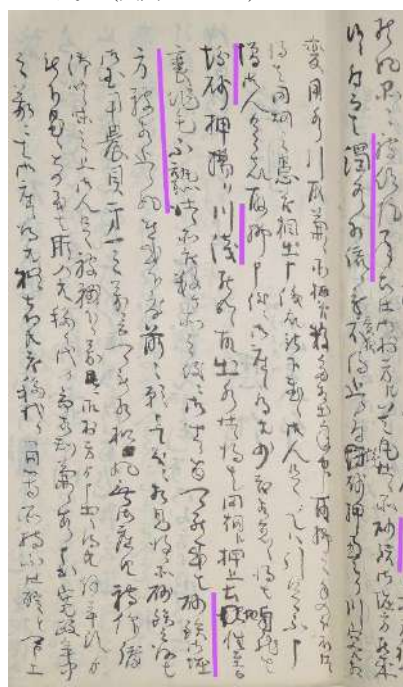
「岩石標本ミニ展」は博物館分館(府中キャンパス農学部本館)にて
3月21日(木)より開催します。お楽しみに!

副館長よりメッセージ

▶ 科学博物館副館長・農学研究院教授 高橋 美貴

(前回から続く。)下に掲げた写真は、岩手県一関市大東町の調査先に残されている古文書の一部です。時代は江戸時代の後期、1816年(文化13)。当時、この地域は伊達家の支配する仙台藩の北東地域に位置していました。この古文書は、この地域の村々から藩に対して、「こんなことでたいへん困っているので何とかしてください」という要望を書いた願書です。それによると、「近年、この地域の河川上流で砂鉄の採掘が行われているために昼夜を通して村々に濁水が流れ込むとともに、河床に土砂が堆積して用水を引き込むことも難しくなっています」「手入れを怠ると土砂堆積によって川が浅くなり、実際、出水のときに田畑に土砂が流れ込んで作物が十分実らなくなった場所もあります」といった事情が述べられ、砂鉄掘りをやめさせてほしいと領主に願っています。

当時、砂鉄は、山で砂鉄を含んだ土砂(花崗岩類の風化土)を掘り出し、それを水流に投じて土砂を流し去り、比重の重い砂鉄を沈殿させることで調達されていました。鉄穴流し(かんながし)と呼ばれる方法です。鉄穴流しによって抽出される砂鉄は採掘土砂量の1~0.5%程度と言われているので、砂鉄採取は膨大な量の土砂流出を引き起こしたのです。鉄の大産地であった江戸時代の中国地方では、それによって沖積平野の急速な成長がもたらされたといわれています。東日本では現在の岩手県域が最大の鉄の生産地でしたので、この地域の河川流域でも同様のことが起こったのでした。とはいえ、仙台藩の北東地域で砂鉄の採掘量が急速に増えたのは、江戸時代の後期から幕末にかけて(18世紀後半~19世紀前半)でした。なぜ、この頃に砂鉄の採掘量が増えたのでしょうか。そこには、この時代の気候変動が関わっていました。従来、気候変動について歴史学は手も足もでなかったのですが、近年の文理融合研究によって状況は変わりつつあります。(次回につづく)



一関市博物館所蔵
「鳥畑家文書」史料
番号41より。
「砂鉄」「濁水」
「?砂」「川浅」な
どの文字が見える。

東京農工大学科学博物館

「創基 150 周年記念企画」

▶ 学芸員・科学博物館特任助教 齊藤 有里加

令和6年度は東京農工大学創基150周年記念の節目の年です。150周年事業期間である5月~11月は、科学博物館もいろいろな企画を実施します。特に「新宿御苑から始まる農工大150周年」として、農と工のルーツであった「内藤新宿勤農局試験場」のある一般財団法人国民公園協会新宿御苑(以下、「新宿御苑」という。)との連携事業を行います。また、本博物館でも教育用掛図の公開や、クワの記念植樹を行い、本学の教育のルーツを振り返りたいと思います。

新宿御苑連携事業：新宿御苑で農工大のルーツを感じよう

1 農工大学150周年「國を紡ぐ」(仮) 展開催 令和6年6月~11月(予定)

新宿御苑において開催する企画展示「農工大学150周年「國を紡ぐ」展(仮)」を引き続き科学博物館に移動し開催します。

2 新宿御苑で古地図を歩く「勤農局試験場デジタルマップ」作成

「新宿御苑から始まる農工大150周年」として、明治11年『内藤新宿勤農局試験場内鹿絵図(そえず)』(宮内庁宮内公文書館所蔵)の古地図をスマホアプリ「Avenza Maps」を使用し公開予定です。スマホの画面でGPS位置情報を見ながら本学のルーツである内藤新宿勤農局試験場の様子をイメージして歩くことができます。



「内藤新宿勤農局試験場内鹿絵図」の古地図(宮内庁宮内公文書館所蔵)

また「勤農局試験場各所解説」ウェブページには『植物御苑建物図録明治年間』(宮内庁宮内公文書館所蔵)から、①養蚕所 ②農業博物館 ③農具製所 ④孵卵所 ⑤蜂蜜製所 ⑥製糸場 ⑦生徒寄宿所 ⑧水田 ⑨果樹園のそれぞれの施設の図面を公開します。当時の学生がどのような施設で学んでいたのか、より具体的にイメージできると思います。

3 学生もイベント協力!新宿御苑出張イベント

新宿御苑にて、講演会「新宿御苑デジタルマップ 明治11年「勤農局試験場」図と今を比べる(仮)」(6月9日開催)「カイコで学ぶ! 遺伝のふしぎ」(6月23日開催。協力:科学博物館支援学生団体「musset」)を予定しています。

博物館内企画：科学博物館で農工大の歴史を振り返ろう

4 小金井キャンパスに桑畑復活！クワの記念植樹

かつて小金井キャンパス内には広い桑園がありましたが、昭和37年(1962)に繊維学部を「工学部」へ改称した際に、養蚕学科は府中キャンパス(農学部)へ移動となりました。現在桑園が残っているのは府中キャンパスの一画になっています。本博物館では「カイコの生体展示」をするため、毎年蚕学研究室からカイコがやってきますが、餌となるクワの確保が大変です。記念植樹により桑畑が復活することで、来館者にクワの成長の様子を見てもらえるようになります。

5 来館して記念ステッカーをもらおう

本学創基 150 周年を記念してステッカーを作成しました。蚕織錦絵のうち、『養蚕教育図』から蚕と桑をデザインに使用しています。

6 掛図で学んだ時代を見る：農工大の教育掛図公開 5月9日～12月末(予定)

当時、高等教育機関で行われていた教育の一端を感じられるように、本館浮世絵展示室内にて学内にある教育掛図を公開します。『植物学教育掛図』『養蚕教育掛図』や、農学部所蔵の掛図類も一部公開予定です。



「植物学教授用掛図
普通植物分類」

(当館所蔵)

「植物学教授用掛図
花之形態」

(当館所蔵)



「友の会サークル作品展」報告

➤ 友の会作品展実行委員長 柴田 郁子



2024年2月3日(土)～10日(土)に第40回サークル作品展が開催されました。期間中、のべ2400人超の来館者があり、各サークルの作品展示を楽しんでいただきました。

毎年来てくださるお客様からは「作品と展示の仕方が年々レベルアップしている。見やすくなっている」との言葉もいただきました。また、

東日本大震災以降交流の続く南相馬の方々も見学においでくださいました。会場では、サークル会員とお客線で作品を通しての交流、また普段はあまり話さない他サークル会員との間で実演を通しての交流等の場面がたくさんありました。さらに、繊維機械の動態展示担当者から繭の扱いの実演で助言をもらう等、伝承技術の交流場面もあり活発な展示になっていました。今後も博物館・お客様・サークル会員達で協力して技術の継承と発展に努めていきたいと思っています。



作品の解説や制作に関するノウハウの情報交換、各サークルのミニワークショップ等も盛んに行われていました。

「タイガー計算キ展」 トークイベント開催報告

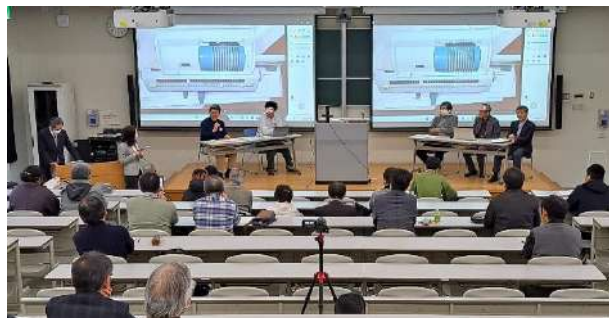
➤ 学芸員・科学博物館特任助教 上田 裕尋

2024年2月10日(土)に「タイガー計算キ展」トークイベントを開催しました。企画展「タイガー計算キ展」では、東京農工大学工学部数理情報工学科(当時)の実習で使用されていた52台のタイガー計算器を展示しています。これらの機器を実際に使っていた実習について、当時の実習を担当されていた小谷善行先生(東京農工大学名誉教授)、中森眞理雄先生(東京農工大学名誉教授)、そして当時学生だった藤森英明様(数理情報工学科3期生)方をお呼びして、実習の狙いや当時の実習の様子について語らっていただきました。さらに、ディスカッサントとして高田正之先生(江戸川大学名誉教授/実習当時は数理工学科助手)と前山和善氏(総合研究大学院大学博士後期課程)に参加してもらい、計算機器の時代的背景などのコメントをいただきました。

イベント当日は50人近い方が参加され、和やかな雰囲気の中進められました。正面スクリーンに実際のタイガー計算器を投影し、登壇者の方々が実際に計算器を使いながら解説できたことは、聴講者が計算理論や計算を進めていく上での難しさや工夫を理解するうえで非常に役立ったと思います。

中でも中森先生によるタイガー計算器と筆算の相性の良さの解説は非常に興味深いものでした。乗算の筆算を行う際、各位ごとに計算を行い、それらを足し合わせることで答えを求めます。そして、この筆算の計算過程は、実は2進法での乗算を非常にわかりやすく表現することができます。タイガー計算器の計算はまさに筆算の計算過程と一致しており、タイガー計算器での計算に慣れることで、2進法での計算過程の理解の入り口として非常に優秀であるということがよく理解できる解説をいただきました。会場内でも納得の声が上がり、現在はもう使われない計算器ではあるものの、コンピューター教育において、現代でも通用するその意義に気付かされるイベントとなりました。

今回のイベントではタイガー計算器以外の西村コンピュータコレクションの企画展を期待する声も多くいただくこととなりました。ぜひ今後の企画展にもご期待ください。



計算器を使用した解説に「懐かしかった」との声も。ぜひ第2回開催を！というご希望も多く頂きました。

「歯車で計算?! タイガー計算器を触ってみよう!」musset イベント開催報告

➤ musset 工学部生命工学科一年 塩澤 真奈

2024年2月17日(土)東京農工大学科学博物館支援学生団体musset(みゅぜっと)主催の企画展関連イベント「歯車で計算?! タイガー計算器を触ってみよう」を開催しました。

今回はワークショップ形式を取り、ハンドルを回すだけで四則演算ができるタイガー計算器で、計算の面白さを伝えることを目的としました。参加する方の年齢や算数の理解度に合わせて計算していただけるよう、桁数の変化や文章題を組み込んだ自作のドリルを用意しました。ワークショップ終了後も楽しんでいただくため、時間の都合で話せなかった内容や計算方法をまとめたプリントも配布しました。

当日はTA(ティーチング・アシスタント)が1グループに1人つき、理解度に合わせて一緒に計算問題を解いていきました。双方向型の対話ができ、サイエンスコミュニケーションの実践ができたと思います。参加者の様子から、「かけ算はたし算の繰り返しで、わり算はひき算の繰り返しである」ということを実感された方も多かったようでした。ワークショップ後には、博物館内に設置されたハンズオン展示を利用して、解ききれなかった問題に挑戦される方もいました。

抽象的で苦手意識を持つ人も多い算数の題材でしたが、参加者とのコミュニケーションを通して、楽しさや魅力を共有できたと感じました。タイガー計算器とゆかりを持つ方ともお会いでき、数学の発展や社会の変化に関わったタイガー計算器100年間の歴史を実感しました。



親子連れのほか、大人の参加者も多く「子どもにかけ算を教えるのにとってもわかりやすい」という声もありました。

「ワタを育てて機械を動かそう」 ワークショップ・友の会展示報告

▶ 学芸員・科学博物館特任助教 齊藤 有里加

2023 年度も参加型企画「ワタを育てて機械を動かそう」のイベントとして、当館で配布したワタの種子を育てた方を対象に「わたくりワークショップ」を開催しました。昨年度から始まったこの企画は、当館の展示資料である「ガラ紡機」で紡ぐためのワタを育ててもらい、最後に参加者と一緒にわた繰りを体験するものです。今年度は、4 月から 5 月に農学部及び工学部の新入生や来館者へワタの種子（品種：弓ヶ浜）を配布し、収穫したワタを当館へお持ちいただきました。昨年よりも多くのワタが集まり、今年の春は皆さんからのワタでガラ紡機を動かすことができそうです。



わた繰り器で種を取り、当館のガラ紡機で糸をつくりました



種から栽培し、糸にすることはできましたが、糸から布にするにはまだまだ強度等に課題があります。出来上がった糸を、今年度は友の会会員有志のご協力により、染色や編み、織加工の試行作品を展示しています。作成の工程では当館展示機を使ったガラ紡糸の特徴がよくわかり、強度等を確保するため、合糸、撚糸の加工に試行錯誤をすることが楽しみです。

今年度も友の会、繊維技術研究会、musset の博物館支援団体、来館者の皆様、学内では農学部作物学研究室、留学生 CPP+ (Cotton Plants Project) の皆様の協力を得ながらガラ紡の動態展示を行うことができました。外部の博物館では江戸東京たてもの園、高槻市立自然博物館の皆様が #ワタを育てて機械を動かそう のハッシュタグをつけて一緒にワタを育ててくれました。来年度も皆さんと一緒にこの活動を続けていく予定です。



当館 2 階展示室にてガラ紡糸を用いた作品を展示中

連携企画展「フランス式・イタリア式・ そして諏訪式へ～VR でよみがえっ た葵町製糸場～」講演会開催報告

▶ 岡谷蚕糸博物館 学芸員 森田 聡美

この度、連携館の協定を結んでいるご縁で、勸工寮葵町製糸場資料をお借りし、岡谷蚕糸博物館で企画展を開催いたしました。関連イベントとして、齊藤特任助教をお招きし、葵町製糸場図面 3D 復元プロジェクトの講演会を開催しました（12 月 23 日）。会場には 15 名の参加者が集まり、熱心に耳を傾けました。図面発見から、3D 復元まで専門家の力を借り、学生とともに CAD 化に取り組む作業はまさに明治の日本人が言葉の違う外国の技術を理解する追体験であったとお話でした。



さらに企画展会場において、実際の図面、写真、模型を見ながら解説いただきました。こちらでは、高林館長との対談形式により、葵町製糸場に導入されたイタリア式繰糸機の動力、熱源、水源、人員、繰糸法などを詳しくお聞きしました。当館所蔵の、昭和 5 年のイタリア式繰糸機についても高林館長が解説。葵町製糸場と比較すると興味深そう

だと盛り上がりました。ご参加の皆様からも、煙突の高さから、壁面の塗り物までご質問が相次ぎ、大変熱のこもった会となりました。



岡谷蚕糸博物館の高林館長（農工大工学部製糸学科卒）とともに模型を見ながら解説する齊藤学芸員。諏訪式繰糸機のお膝元、岡谷市ならではの熱心さ！皆さんからご質問も多数いただき、大変勉強になりました。

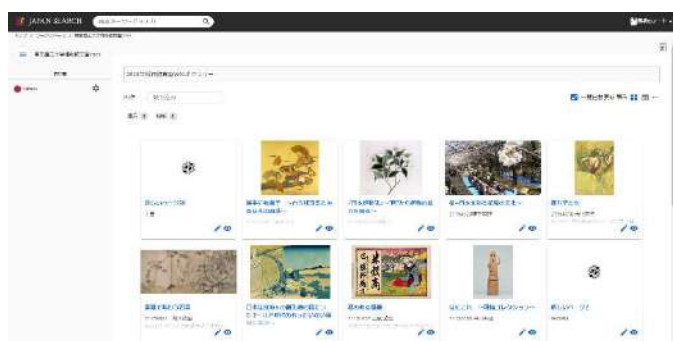
2023 年度学芸員実習報告

➤ 学芸員・科学博物館特任助教 上田 裕尋

2024 年度の博物館実習では、前期に黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクションをテーマとして双方向コミュニケーションについて体験を通して学ぶことを、後期ではデジタルアーカイブをテーマに資料整理やデジタル化、そしてデジタル化された資料の活用に注目した実習を行いました。

例年、実習の一環で、博物館資料の横断検索サイトである Japan Search (<https://jpsearch.go.jp/>) を利用して Web ギャラリーを作成していました。博物館法の改正もあり、業界を挙げてデジタル化や DX が叫ばれる博物館ですが、これらの活用における道筋はまだまだ模索の段階といってよいように思います。今年度の実習では、デジタル化した資料の利点とは何だろうか？ということを考えるため、「博物館にこない人や来られない人々へも届けるギャラリー」の作成を目指すこととしました。難しい課題と思われましたが、最終日のギャラリー発表会では我々教員だけでなく、発表会に参加された学外の先生や技術者の方々までも驚くような工夫の詰まったギャラリーが紹介され、学生同士だけではなく我々も勉強になるものとなりました。双方向コミュニケーションやデジタル化など、求められる専門性が増え続ける学芸員業界ですが、それらに対応し、前に進むことができる未来の学芸員を育てることを目指して今後も授業を展開していきたいと考えています。

今回のニュース速報では、今年度の課程を修了した学生の最終課題「博物館 DX に期待できることはなにか？」に対する意見と「博物館実習を振り返り学び得たこと」を一部抜粋して紹介します。



学芸員実習生が「Japan Search」上に作成した WEB ギャラリー。各学生が自分のテーマに基づいて情報を集め、デジタル空間で展示室を作成しました。実習最終日は学外の教員・有識者も含めた見学者へ向けてプレゼンテーション（対面・オンラインのハイブリッド開催）を行いました。

●「博物館における DX に期待できることは何か？」

➤ 工学部 4 年 川島 大季

博物館学芸員実習において岩石標本や植物標本、織機模型を cloud 上の Excel のスプレッドシートにまとめた。今までは帳簿、あるいは標本箱に記録していたものをネットワーク上に保存し、整理しておくことで、災害や事故等が起きた時に、紛失や混乱のリスクを減らすことができると期待する。

実習において、Japan search というデジタルアーカイブも使った。Japan search では、アーカイブ上で、ユーザーがテーマごとにギャラリーを作成し共有することができる。実際に今回ギャラリーを作成する過程で、さまざまな史料を読み漁った。その中で知識を深めたのはもちろんのこと、ギャラリーと関係ない資料までつつい観てしまった。結果、たくさんの知識を獲得することができたと感じている。

実習の最後には、発表会があり、同じ授業を受けている人たちのギャラリーを見た。どのギャラリーも個性的で自分にはない視点で資料を観ることができとても刺激になった。このように、人々がデジタル資料を共有し合うことで、お互いに学習意欲を高め合い、知識を深め合う、さらには新たな視点の発見にもつながっていくのではないかと期待している。

●「博物館実習を振り返り学び得たこと」

➤ 農学部 3 年 酒井 結

今回の実習を得て、改めて博物館の展示には学芸員の手間と工夫が詰まった結果だと感じた。これまでの座学とは違い、実際に資料を触り、展示に関わる作業をしたことでより博物館に行ったときに見るポイントが増えたと感じる。

前期の実際の展示の作成では、複数ある資料から何を目的にどのような伝え方をするのか、枠組みから決めていくことはかなり難易度が高かった。グループであったからこそ意見交換ができ、試行錯誤しながら展示を組み立てる事ができたが、自分一人では一つの考えに固執してしまい、そこから抜け出せなかっただろうと思う。また、キャプションについては文字の大きさやルビをどこまで振るかなど予想する対象者に寄り添って細やかな気配りをする必要性がある事を知った。令和 5 年 8 月 26 日開催のサマーフェスタでは、自分が来場者に説明をする際には同じような質問が来ることも多かったので、一度展示をつくった後に来場者目線でもう一度見返してみることも大切だと感じた。反省点は多々あるが、学ぶことの多いサマーフェスタだった。

ジャパンサーチでのデジタル展示室では自分の想像するやりたい事と実現できることの差に苦しんだ。伝えたい事とやれる事の乖離は仕方がないので、今できるものでどのように自分の理想に近づけていくか考える事も大事だと思った。最後のプレゼンの時間に他の人の工夫の仕方を見て学ぶものも多かったので、普段から様々な展示を見ておくことで自分の引き出しを増やす事ができると感じた。今後もっと色々な博物館を訪れて対象者や伝えたい事などを考えながら展示を見たいと思う。

繊維技術研究会 新会員募集

➤ 科学博物館支援団体 繊維技術研究会会長 葛西 成治

学芸員実習を受ける以前に持っていた博物館のイメージは、コレクションを通して新たな情報を来館者に提供しているという面ばかりに目がいき、知識を得る場と感じていたので、はじめは双方向性を意識することに困惑した。科学未来館に行ったときは来館者の立場で、当然正解を教えてもらえろと思いきや、一緒に考えてみようと言われたことに、戸惑いを感じた。しかし、お互いにコミュニケーションをとることで、自分の発想が他者と同じだったり、自分にはない新鮮な意見を吸収出来たりと、新たな魅力に気が付くことができた。これを生かして、サマーフェスタではただ解説を並べるだけではなく、お客さんとコミュニケーションを取りながら知識を深めたり意見を交換できたりしたいと意気込んだ。それでもうまくいかないことは多く、実際に実行していく上で難しかったのは、どのようなお客さんを対象にして展示を作るかという点だ。

デジタルアーカイブについては、普段なじみのないデジタルという空間を対象に一人で企画を進めていくことについての不安感があった。前期ではグループ単位で活動していたため周りとの意見をすり合わせていく必要があったが、後期では自分で自由に企画できるのが良かった半面、独りよがりなミュージアムにならないように、他の人が見て分かりやすい展示になるように心掛けた。また、複数の画像を表示する技術や動画を取り込める機能などデジタルならではの機能を知った上で、ジャパンサーチの特性を生かしつつ、ありきたりなものは作りたくないという思いがあり、試行錯誤した。結果的にみんなに興味を持ってもらえる作品ができて満足している。デジタルミュージアムで自分の思うままに自由に作っていいからこそ、自分で見せ所を考えながらコンセプトやこだわりを持って構成していた人の発表が魅力的に感じた。



「サマーフェスタ」での実習生集合写真。イベントも大好評でした！

繊維技術研究会は繊維に関わる技術の伝承や、ものづくり、調査研究を通じて科学博物館活動を支援する目的で1999年に設立されたボランティア団体です。会員のキャリアは紡績や合繊会社、繊維機械メーカーに勤務された方だけでなく、様々な経歴や趣味をお持ちの方々の集まりです。

支援活動を一層、充実させるため、上記目的に賛同され、繊維に関してご自身の知見やキャリアを活かした活動にご関心のある会員を募集中です。専門的な繊維とか機械などの知識をお持ちでなくてもかまいません。

毎月第3火曜日に例会を開催しています。

また概ね毎火曜日には科学博物館の繊維機械動態展示・解説活動なども行っています。

★ご関心のある方は第3火曜日に科学博物館内 繊維技術研究会をお訪ねください。

★繊維技術研究会の設立趣旨、活動内容などが会員募集記事と共に東京農工大学同窓会ホームページの「お知らせ欄」に掲載されています。ご高覧いただければ幸いです。

以下のURL、QRコードからお入りください。

<https://tuat-dousoukai.org/news/news-all/page-3006/>



連絡先 東京農工大学科学博物館 電話 042-388-7163



動態展示活動の様子（科学博物館 facebook より）

博物館の前庭に 変化が…？



現在の博物館前の畑の写真です。まだ春の兆しは見えませんが、すでに畝が作られ、創基 150 周年記念事業に向けて準備が進んでいます。この場所には今後、府中キャンパスからクワが定植されますが、どう変化するのか、一年を通して折に触れてお知らせしていきたいと思います。お楽しみにお待ちください！



「科学博物館ニュース速報」第 58 号

発行日：2024 年 3 月 15 日

編集：科学博物館ニュース速報編集委員会

発行：東京農工大学科学博物館

連絡先：kahaku@cc.tuat.ac.jp

042-388-7163

収蔵資料活用・取材報告

1. 資料貸出 0 件
2. 取材及び掲載 1 件
 - (1) 情報処理学会 会誌「情報処理」取材
会誌内に企画展「タイガー計算機展」musset ワークショップの体験談を掲載

◇Information◇

2023 年度はコロナ禍から通常の博物館活動へ少しずつ歩みを進めてきた一年間でした。企画展やイベント、学芸員実習でも対面を中心とした企画を立てられるようになり、オンラインだけでは補いきれない双方向コミュニケーションの重要性を改めて感じた一年でもありました。

また、この 3 月で 2020 年度より 4 年間館長を勤めた金子館長が退任されます。着任早々コロナ禍による臨時閉館という難事にあたり、授業や運営のオンライン化、WEB 企画展やオンラインイベントの開催等において、情報工学専攻の金子館長のもとで館運営に臨めたことは、教職員一同大変心強いことでした。退任後も、またご家族と遊びに来ていただければ嬉しくおもいます。

4 月からは新館長を迎えて、まずは創基 150 周年記念イベントの準備をすすめてまいります。引き続きよろしくお願い申し上げます。



友の会修了式の際に講堂に飾られたランの鉢植えを
本館受付前に置かせていただいています。

美しい花をお楽しみください。